

L.M.モンゴメリの「赤毛のアン」を臨床心理学的に読み解く

中植 満美子

1. はじめに

「赤毛のアン(Anne of Green Gables,1908)」はL.M.モンゴメリによる、ある孤児の生き様を描いたベストセラー小説であり、現在も新訳や関連する文献の出版が後を絶たない。本論では今なお多くの読者により読み継がれる本作品に秘められた作者からのメッセージを、孤児であったアンと精神発達と傷つき体験からの回復過程、そしてそれを支えた環境要因との関係から、臨床心理学的に読み解くことを目的とする。

2. 作者紹介

L.M.モンゴメリによる自叙伝、「険しい道(1917)」と1985年に出版された「L.M.モンゴメリの日記I(1889-1910)」、菱田(2014)による「快読『赤毛のアン』」、澤田他(2014)による「赤毛のアンの世界へ」を参照し、L.M.モンゴメリの人生を以下にまとめる。

1874年 カナダのプリンス・エドワード島、クリフトンに、父、ヒュー・ジョン・モンゴメリと母クレアラ・ウルナー・マクニールの第一子として生まれる。

生後20か月の時に母親が結核で死亡したため、モンゴメリは、キャヴェンディッシュの母方の実家で祖父母に育てられる。厳格で敬虔な長老派教会の信徒であった老夫婦は、モンゴメリを厳しくしつけ、名家の子女にふさわしい気位と自尊心をもつように養育した。そこでモンゴメリは物質的には何んも自由ないが、しかし孤独な子ども時代を過ごした。自叙伝には、小学校のクラスでは、皆が裸足なのに、自分だけブーツを履いていた、とある。果樹園が庭にあったのはモンゴメリの家だけだったので、リンゴ

を持ってクラスに行けば、リンゴと交換に、クラスメイトの持つ大抵のものを手に入れることができたという。

15歳の時に、よりよい教育を受ける希望を持って、プリンスアルバートの再婚した父親の家に行くが、継母との折り合いが悪く、家事や子守りをさせられ、ほとんど学校に通わせてもらえなかった。そのため、翌年には再び祖父母宅に戻った。1891年、教員免許取得のためシャーロットタウンのカレッジに入学、翌年、プリンスエドワード島のベッドフォードで教鞭をとる。

1895年の秋にはノヴァスコシア州ハリファックスのダルハウジ大学で、英文学のコースを受講している。しかしながら学位は取得していない。この当時、100名の学生の中で、学士の学位が取得できたのはほんの4、5名だったという。この年、子ども向けの雑誌に送った物語が採用され、初めて原稿料をもらっている。その後も新聞や雑誌に熱心に投稿を続けた。祖父が郵便局を経営しており、誰にも内緒で郵便を送ることができたことが、モンゴメリのひそかな挑戦を支えた、とも記されている。貴重品であった紙も、郵便局の業務で生じる用紙の裏が再利用できた、と、「エミリー(1923)」シリーズに記載されている。

1896年、21歳の時に、プリンスエドワード島で教職に就く。その2年後、祖父が亡くなり、一人になった祖母と暮らすため、教師生活を断念し、祖母宅に戻る。25歳の時、父親が肺炎で死亡する。26歳の時にハリファックスに行き、新聞の校正兼記者として働くが、その8か月後に再び祖母宅へ戻る。女性であったモンゴメリに相続権が無かったため、叔父親子が祖父母の家を相続することとなった。モンゴメリは、祖母の生活を守るために、叔父親子に奪われそう

になっていた祖母宅を、祖母と同居することで守ったとされている。

1905年、30歳の時に、「赤毛のアン」を書き始める。31歳の時に書きあげた「赤毛のアン」の原稿を四つの出版社に送るが、すべて送り返されてしまう。同時期に牧師のユーアン・マクドナルドと婚約する。

1907年、32歳の時に、「赤毛のアン」の原稿を再度読み返し、ロンドンのページ社に送り、採用される。戦争の影響もあり、暗いムードの中で、1908年に「赤毛のアン」が出版され、その作風は歓迎されてたちまちベストセラーとなる。初めて受け取った印税は1700ドルであった。当時はこれで農場を2つ、3つ、家を3、4軒購入できるほどの金額だったそうである。

1911年3月に祖母が亡くなる。祖母宅も取り壊され、同年、7月に婚約者のユーアンと結婚する。その時、モンゴメリは36歳であった。ここからオンタリオ州リークデールで牧師の妻としての生活を開始する。37歳で長男チェスター出産、二男は死産であった。息子を失った同時期に第一次世界大戦が始まり、心を痛める。40歳で三男スチュアート出産。ユーアンは憂鬱症の発作を起こすことが度々あった。発作が起きると固まってしまい動けなくなるような症状があったそうである。そのために、モンゴメリは生活の為に人気の「アン・シリーズ」の続編を書き続けなければならなかったという。出版社からの続編の要求もかなりあったらしい。初めから、この後11巻も続くシリーズになる構想があれば、アンの成長物語はもう少しゆっくと描写されたかもしれない。

1935年、60歳のときに、牧師職を辞任したユーアンと、トロントに移り、「旅路の果て」と名付けた家に住む。

1942年、67歳で没す。プリンスエドワード島のキャベンディッシュの共同墓地に葬られている。

3. 物語のあらすじ 登場人物

① 主な登場人物

アン・シャーリー（主人公、11歳）、
マリラ・クスバート（養母？雇用主？
元々男児を働き手として望んでいた）

② 家族構成

養母の兄 マッシュウ・クスバート
養母 マリラ・クスバート
養女 アン・シャーリー

③ 主人公の抱える心理的課題

アンは実の両親と幼少期に死別し、二つの家庭で引き取られるも、働き手としての扱いしか受けておらず、その家族との別離も繰り返されている。安定した愛着関係に問題が生じている可能性がある。多弁で空想癖があり、虚言もみられる。衝動性が非常に高く、喧嘩などトラブルが多発している。場の空気を読めない。後に不登校にもなる。

④ 環境の問題

クスバート家でも今回の養子縁組をあくまで働き手になれる男児を引き取るつもりで依頼しており、アンを囲む環境には、序盤から混乱があり、安定しない。

（場面1） アヴォンリーの村

登場人物)マッシュウとマリラ・クスバート兄妹、
リンド夫人、アン・シャーリー（11歳）

状況)アンは生後三か月でトマス家に引き取られる。トマス家の父親が死んでハモンド家に引き取られるがそこでも父親が死に、施設入所となる。四か月間ホープタウンの孤児院にいたアンは、働き手を期待して男の子を引き取ろうとしていたアヴォンリーのマッシュウとマリラの家に間違っって引き取られ、騒動の末、グリーン・グイブルスに住むことになる。リンド夫人に赤毛の事を指摘され、大喧嘩してしまうが、マッシュウの説得でアン、リンド夫人に謝罪に行く。

① アンの抱える課題

アンが抱える課題として、攻撃性の問題、

空想癖、虚栄心、というようなものがある。これらは当時、モンゴメリの暮らした文化圏においては、孤児院などで育った子どもの特徴として、虚言と癩癩（攻撃性の高さ）は共通認識だったようである。モンゴメリも新聞記事で孤児の事件を読んでアンの人物像を考え始めたという。アンの場合、癩癩を起す事（攻撃性の高さ）は、自己防衛のために発動するもので、特に自分を否定的に見る相手に怒りをぶつけることでやっと自我を保つ、という行動パターンとして描かれている。また、空想癖については、困難な現実から自分を切り離して楽しい空想に身を委ねる現実からの逃避という防衛である。そして虚栄心は、アンが抱える外見へのコンプレックスを表すものである。

現実を切り離し、想像の世界に逃げ込む、というのは、実際にはモンゴメリのとった生きるための方策だったと考えられる。モンゴメリの他の作品にも、想像力を糧に生きる登場人物は少なくない。

② 防衛機制の特徴

防衛機制とは、人が葛藤状態におかれた時に、自我が利用するあらゆる手段であり、無意識に発動すると考えられている。防衛機制は生まれつき備わっているものではなく、各個人が発達過程において次第に獲得していくものである。

数ある手段の中で効果のある方法は主要な手段として常用され、性格化しやすい。

生後三か月で両親が熱病で死亡し、他家に預けられる。不安になると空想にふけり、ストレスを感じると多弁になるという特徴がみられる。これは現実からの「逃避」、あるいは「知性化」という一種の防衛機制であるとも考えられる。

③ 付加疑問文の多発

菱田（2014）によると、原著では、駅からグリーン・ゲイブルスまでの道中、アンはマッシュウとの会話の中で、付加疑問文を用いた発話を多発させている。付加疑問文とは、「・・・ですよ？ そうじゃない？」という表現であり、相手に確認や同意を求める表現である。何度も何

度も確認や同意を求めるやりとりから、アンの不安や緊張、承認欲求の高さが表現されているようである。一方で、多様な主語に対しても正確に応じられるアンの英文法の力により、アンの知的能力の高さ、教養、ある程度の教育を受けてきていることが暗に示されている。大人であるマッシュウの文法の方が間違っており、この対比でアンの賢さ、知性が引き立てられている。

④ 現実自己と理想自己の解離

アンは名前を尋ねられると、「コーデリアと呼んでほしい」と言い、自分ではない別人になりたい願望を顕わにした。この時点で、アンの現実自己と理想自己が解離していたことがうかがえる。その背景には、これまでの養育環境で、十分に大切にされた体験が乏しく、低い自尊心や健康な自己愛の発達不全が考えられる。

⑤ 「基本的信頼感」の問題

「基本的信頼感」とは、E.H.エリクソン

（1950）による心理社会的発達理論の第一段階、乳児期の心理的発達課題である。これは、「自分はここに存在していてよい」という自信につながる感覚である。この基本的信頼感が「不信」を上回り体験されることが望ましいと考えられている。また、「不信」が大きいことがその後の病理に繋がるとエリクソンは述べている。

養女となって本当の家族を得られる喜びでいっぱいだったアンは、求められていたのが男児だと知り、打ちひしがれる。スペンサー夫人の計らいで、ブリュエット夫人がアンを「働き手」として連れて帰ろうとし、アンはすくみあがる。孤児院に入る前もトマス家とハモンド家にて、労働力としてしか扱われてこなかった。親の愛を求めながらも、労働力として期待され、望むような環境を与えられなかった、というのは、モンゴメリの父親宅での実体験が素地にあるように思われる。

アンは11年の人生の中で3回も大人に捨てられる体験をしている。これが現実ならば、物語に描写されている以上にアンが精神的に不安定で、人格に歪みが発生してもおかしくない。

山岸 (2015) が、アンが学習面で問題を呈することなく、また同年代の子ども集団にあまりにも簡単に馴染む様子に、この設定は発達の「無理がある」と指摘しているが、筆者自身、社会的養護の対象児童と関わってきた経験から、アンの状態には、過酷な幼少期を生きてきた子どもにしては健全すぎると思われる点が多いと感じている。

アンのような体験をベースに持つ子どもが思春期を迎えて、考えられ得る状態としては、環境への過剰適応や、自尊感情の低さ、愛着障害、関係依存、非行傾向等があげられる。しかしながら3カ月で里子に出され、養育環境が安定せずに住居を転々とした子どもにしては、アンは比較的素直に、しかも知的に育っている。アンの実の両親は高校教師という設定である。イギリス系カナダ人のモンゴメリにとって、自分の祖先がイギリス人である、という伝統は貴重であり、「氏より姓」の真逆、環境より血筋の影響を重んじたのかもしれないと考える。作中のアンは、20か月まで母親に、その後は祖父母に愛されて育てられた作家自身の投影像といえるかもしれない。あるいは里親のトマス家、ハモンド家での養育がアンが思うより適切だったと考えられるかもしれない。山岸 (2015) も、里親宅でのアンへの扱いについては、アン自身の語りしか情報が無く、実際はアンが話しているよりは、養育的な環境だったのかもしれない、とも述べている。

アンを支えた環境要因) アンを支えた環境要因として、序盤から、マッシュウという受け皿の存在が挙げられる。マッシュウは、アンのお空想癖やとめどないおしゃべりを否定せず、アンと自分の違いを楽しんだ。これは、アンが、あるがままを受け止められた貴重な体験であった。またマッシュウは、リンド夫人への謝罪をアンに促す際に、「自分が変わらなくていい、アンに(ここに)いて欲しいので、ちょっとすませてしまえばいい。」と助言し、アンはこれはお芝居だ

と自分に言い聞かせて大変芝居じみた大げさな謝罪をする。マッシュウの助言によって、アンはここでも救われている。

(場面2) はじめての日曜学校
登場人物) アン、ダイアナ・バーリー
状況) アンは初めて日曜学校に行く。帽子に花を飾りたてたので、村の噂になる(外見へのこだわりが表されている)。この時、ダイアナ・バーリーと腹心の友の誓いを立て、ダイアナに「あんたって変わってるわね、アン。でもあたし、ほんとうにあんたが好きになりそうだよ」と言われ、受容される。

里親宅で孤独だった頃のアンは、本棚のガラスの扉の中に、イマジナリーフレンド(想像上の友達)がいると思っていた。これはモンゴメリ自身の実体験でもあると自叙伝にある。そのような状況で、生きている生身の美しい少女が自分の親友になってくれるのがどれだけ嬉しかったことだろうか。茂木 (2013) は、コンプレックスを持ちながらも、美しいダイアナに対して「嫉妬しない」アンに美点を見出しているが、実際の所、アンは、自分とダイアナを比較できるほどの自尊感情をも持ち合わせていなかったのかもしれない、と考える。

(場面3) グリン・ゲイブルスで事件が起きる
登場人物) アン、マリラ、マッシュウ
状況) マリラが大切にしている紫水晶のブローチが紛失し、アンが疑われる。「正直に言わないのなら」と、ピクニックへの参加も禁止されそうになり、アン、ピクニックに参加したい一心で、嘘の告白をする。後からブローチが出てきて、なぜ嘘をついたのか、とマリラに詰問されると、どうしてもピクニックに行きたかったから、自分が盗ったように話せば、行かせてくれるとおもった、と言う。マリラ、「孤児」のステレオタイプ(嘘と癩癩)でアンを見て、疑ってかかってしまったことを後悔する。

⑥ アヴォンリー中の様々な場所に命名する

物語には様々な印象的な場所の名前が登場する。例えば、「輝く湖水」、「恋人の小路」「歓喜の白路」、「アイドルワイルド」等である。これについても、モンゴメリは自分が実際にしていたことだと自叙伝に記している。

これらは、アヴォンリーの村社会に対するアンのちょっとした抵抗と、自分が場をコントロールしたい気持ちの象徴である、という解釈がある（菱田、2014）。物語開始当時アンは11歳であり、丁度思春期の入り口に到達している。その年代のこうした独自のネーミング等は、何もかも大人の思い通りにはならない、という現実に対する抵抗とも考えることができる。

（場面4）アヴォンリーの学校

登場人物) アン、ダイアナ、ギルバート、先生
状況) アンは初登校の学校で、ギルバート・ブライスに髪の毛の色を「にんじん」と言われ、ひっぱられ、からかわれる。カッとなり、ギルバートに石板で殴り掛かり、先生にもマリラにもこっぴどく叱られる。以後二人は宿命のライバルとなる。アンの最も激しい攻撃性、衝動性が表されたエピソードである。

この事件の後、アンは不登校になる。リンド夫人が、フィリップス先生の無配慮さを批判し、アンは登校しない意思を尊重される。

（場面5）ダイアナをグリーン・ゲイブルスに招く

登場人物) アン、ダイアナ、バーリー夫人、マリラ

状況) 仲良しとなったダイアナをアンはお茶に招く。アンはダイアナにいちご水と間違えて葡萄酒を勧めてしまう。たくさん飲んで気分が悪くなったダイアナはすぐに帰宅するが、母親のバーリー夫人は、アンがダイアナにわざと飲酒させたと思い、アンとダイアナの交際を禁止する。アンはダイアナに会いたかったため、一目でも会おうと登校を再開したため、不登校状態は解消した。しかしながら、ダイアナとは学校でも交流することは出来なかった。

⑦ 注意力の欠如

気分が悪くなるほどの強い赤ワイン、香りや色の違い等、アルコール飲料であるかどうか、気が付きそうなものであるが、こうしたエピソードに、アンの思い込みの強さや、空想への過度な陶酔や没入、注意力の欠如が表されている。

⑧ 頑なな母親イメージ

バーリー夫人についても、里親だったハモンド夫人について、アンの抱く母親のイメージが、「話を聞いてくれない、自分を悪い存在だと決めつけてくる人」という印象を与える像が多い。

厳格な祖父母や、継母の存在の影響や、母の愛を体験することがなかったモンゴメリならでの表現なのかもしれない。

ここまでのところで、アンは、大切な関係性や学習の機会を、自分の抱える問題の為に失ってしまっている。しかしながらこれまでの喪失体験と異なり、ここでは少なくともアンには居場所や支援者がいる。

モンゴメリ自身にとっては少なくとも祖父母宅が「帰るべきところ」となってくれていた。再婚した父親の家庭での作家自身の傷つき体験で、モンゴメリは自分の「居場所」を強く実感したのではないかと考える。

（場面6）バーリー家での看病が転機に

登場人物) アン、ダイアナ、ミニー・メイ、バーリー夫人、ミス・ジョゼフィン・バーリー

状況) アンは、大人たちが遠方に出かけて不在の夜に、ダイアナの妹、ミニー・メイの喉頭炎を一晩中一人で看病し、命を助ける。里親宅で、子どもたちの看病をした経験がここで役に立った。バーリー夫人に感謝され、ダイアナとの交流が許される。その後、ダイアナの誕生日に、初めての音楽会に行く。夜、バーリー家の客用寝室のベッドに飛び込み、ダイアナの大叔母、ミス・ジョゼフィン・バーリーの怒りを買うが、お詫びに行ったアンは気に入られる。

⑨ 過去の体験が初めて誰かの窮地を救い、役に立つ経験ができた。これにより、別人に

なりたい願望であふれていたアンが、自分の人生にも何か意味がある、と感じ、現実の自分に向き合い、体験を積み重ね、自分のいる社会を受け入れ繋がり始める。

- ⑩ 人生の支援者①を得る（経済面・社会的安定へ）ミス・ジョゼフィン・バーリーは、この後アンへの支援者となる。
- ⑪ 再登校後、学習面で担任とうまくいくようになり、アンへの自尊感情の底上げにつながる。

（場面7）グリーン・ゲイブルスに新任牧師アラン夫妻を招く

登場人物）アン、マリラ、アラン夫妻、マッシュウ

状況）新任牧師アラン夫妻がアヴォンリーに赴任してくる。アラン夫人を招いてのお茶会で、レイヤー・ケーキにまたもや不注意から、痛み止めの薬をいれてしまい、大恥をかく。その後牧師館にお茶に招かれるが、失敗に対して、アラン夫人は「あら、だれもやるような、こっけいなまちがいじゃありませんか。」、と、アラン夫人は、失敗はアンが孤児だから・・・という見方をしなかった。

- ⑫ 人生の支援者②を得る（心の安定）

アラン夫人もまたアンへの人生の支援者となる。アラン夫人は、自分自身もその後牧師夫人になったモンゴメリの理想の自己像として描かれている。

（場面8）屋根の棟を歩く

登場人物）アン、ジョシー・パイ（この頃村で唯一アンを未だ「孤児」扱いする人物）

状況）「命令遊び」でジョシー・パイと張り合い、屋根の棟を歩いて転げ落ち、全治7週間の怪我を負う。この結果、マリラがアンへの存在がどれだけ貴重になっているかを痛感する。

回復後、学校に復帰し、フィリップス先生の後任の新任教師、ミス・ステイシーに出会う。先生を慕うようになる。

- ⑬ 人生の支援者③との出会い（学力安定と心の成長）

（場面9）クリスマス（マッシュウとの関係性）登場人物）アン、マッシュウ、マリラ

状況）クリスマスに、アンはマッシュウより、夢に見ていたパフスリーブ（膨らんだ袖）の素晴らしいドレスをプレゼントされる。（華美なもの、虚栄心を煽るものをマリラは嫌がるのだが）。その夜の音楽会で暗唱をして、皆の喝采を浴びる。マッシュウとマリラも感激する。アンの上級学校への進学をマッシュウらは考える。

- ⑭ マッシュウが果たした役割

フィリップス先生やベントレー牧師といった男性キャラクターは旧弊で無能な人物として描かれている。一方、同じく無口で人と交際せず、昔からの生活パターンを変えないマッシュウも前述の男性と類似しながらも、作中で大きな役割を果たしている。菱田（2014）はそれを以下の6点にまとめている。

- アンをグリーン・ゲイブルスに連れてきたこと
- アンを引き取りたいとマリラに強固に主張したこと
- リンド夫人にかんしゃくを起こしたアンに、謝罪に行くように勧めたこと
- 討論クラブのコンサートにアンを行かせるよう主張したこと
- アンを高等教育機関に進学させることを言い出したこと
- 物語の全編を通してアンのあるがままを受け入れ続けた姿勢

上述する5つのエピソードと、物語を通じてマッシュウが示した姿勢には、モンゴメリが描いた理想の父親像が投影されていたのかもしれない、と考える。アンがアヴォンリーに受け入れられ、アンの世界が外に広がるときには必ず、マッシュウのふだん見せない行動力や意志の力が介在している。

(場面 10) 13 歳の日々

登場人物) アン、ダイアナ、ジェーン、ルビー・ギリス他

マリラ、ギルバート、ミス・ステイシー

状況) ダイアナ、ジェーン、ルビー・ギリスらと物語クラブを結成する。

行商人から買った染料で、アンは髪を緑に染めてしまう。この出来事は、アンの外見への捉われや虚栄心を自制するきっかけになる。

テニスの詩のエレーン姫になって小舟に乗り、危うく沈みかけたところをギルバートに助けられる。ギルバートの仲直りの申し出を冷たく断り、後々まで後悔する。

⑮ 文学的教養を磨くことの意味

イギリス系カナダ人だったモンゴメリにとって、伝統は非常に貴重なものだった。しかしながら当時はプリンスエドワード島をはじめとするイギリス領だったカナダが独立する時期であり、イギリス本国ほど、階級や身分がはっきりしていないカナダの文化の中で、それなりの育ちや身分を証明するものとして、社交界の中で文学的教養を披露することが求められていた。

前述もしたが、心理学的には、自分をより知的に見せることで自分を守る「知性化」という防衛機制で説明できる。モンゴメリ自身が自分自身をそのように守っていたのかもしれない。

(場面 11) クィーン学院を受験する

登場人物) アン、ミス・ステイシー、ギルバート

状況) アンはクィーン学院を受験し、ギルバートと同点で首席合格する。15 歳の 9 月にクィーン学院入学。ステラ・メイナードとプリシラ・グラントという友人を得る。

クィーン学院を翌年卒業。アンはエイヴリー奨学金を受賞し、ギルバートは金メダルを獲得する。卒業式にマッシュウとマリラも出席し、アンを育てた幸福をかみしめる。アン、その後、アヴォンリーに帰省。ギルバートは家庭の経済事情で、大学進学を延期する。アンは学費を得

る為に、教師になることを決意した。当時、女性が働く場所はかなり限定的であった。

(場面 12) グリン・ゲイブルスの変化

登場人物) アン、マッシュウ、マリラ、ギルバート

状況) 全財産を預けていた銀行が倒産したことを知り、マッシュウが心臓発作により死去する。その後、マリラの視力が衰え、マリラは農場の切り盛りをあきらめ、グリン・ゲイブルスを売却し、リンド夫人の家に引っ越すことを考える。マリラを一人置いていけないことを痛感するアンは、レドモンド大学進学をあきらめ、家を守りながらカーモディの教師になる決心をする。そこにギルバートが、アヴォンリーの学校の教職をアンに譲ってくれる。これがきっかけで二人は和解し、親友となる。守るべき大切な故郷と親友をアンは得たのである。

4. 考察

(1) アンと精神発達とその変化

アンは、基本的な愛着の素地が整った子どもとして描写されている。「引き取り」に対して希望を持てる少女としての状態像は、親の無い、あるいは親と暮らせない子どもたちの様子とはかけ離れている。親から見捨てられたと感じた子どもたちは、基本的信頼感を傷つけられているため、自分が存在してよいという感覚さえ希薄であることが多い。無差別愛着などの愛着障害状態を示したり、人を信じられず、関係が構築できない子に育つこともあるが、アンはそこまでの状態ではない。

これが実際に存在するケースだと考えると、少なくとも最初に引き取られたトマス家では、幼少期は大切に育てられ、養父母と良好な関係性の素地を築いてもらえていたと考えられる。しかしながら、それはアンと語る生育暦とはかけ離れている。里親の家が教育的によい環境ではなかったとすると、L.M.モンゴメリは人物設

定時に環境要因の影響をあまり重視しなかったと考える。

しかしながら序盤のアンには、安定しない養育環境の影響で、基本的信頼感の欠如、自己統制の困難、衝動性の高さ、健康な自己愛の発達不全、人間関係における防衛のパターンによって生じる問題等が見られる。

D.W.ウィニコット(1971)は、安定し連続した養育環境の重要性を主張し、環境からの供給の連続性によってのみ、人生の線上に連続性が持てるようになる、と述べ、それが難しい場合に、存在の連続性を欠いた「偽りの自己」を作り上げる、とした。アン自身、自分があるがままを受け入れられず、「コーデリアと呼んでほしい」と物語の序盤で願うも、グリーン・ゲイブルスでの安定した日々において、徐々に自己の連続性を再体験し、物語の後半では、自分はグリーン・ゲイブルスのアンでいい、と、現実自己を受け入れている。

これはまた、健康な自己愛の発達とも関連しているように思われる。H.コフォート(1977)は、自己の成長のためには「自己対象」の円滑な発達が必要と考え、2歳から4歳までに、「鏡映自己対象」(ほめてほしいと思った時にほめてくれる、ちゃんと注目してくれる、自分のことを愛してくれる内在化された対象)が、また、4歳から6歳までに、「理想化自己対象」(不安なときや落ち込んでいるときなどに、安心感や自信を与えてくれ、生き方の方向性を見出してくれる内在化された対象)の二つの段階の発達を仮定している(藤森,2016)。序盤のアン不安の強さや承認欲求、問題行動の背景にはこのような「自己対象」の発達不全が関連していたように思われるが、グリーン・ゲイブルスでの安定した環境により、アンは物語の中でも内なる自分と対話するようになり、持ちうる能力を発揮してゆく。それは学業面での成功と、アヴォンリーでのアン存在への承認という形で表される。

(2) 作品誕生の根底にある環境の問題

モンゴメリ自身、生後20か月までは実母と一緒に過ごしており、その後祖父母に親代わりを務めてもらい、大切に育てられている。その祖母が亡くなるまで祖母を守って一緒に暮らしたことや、物語の随所に挿入されている作者自身の体験の描写を思うと、11歳のアン像には、モンゴメリの自己像の投影が色濃く影響しているように思える。

モンゴメリが、再婚した父の家にすぐに引き取られていれば、「赤毛のアン」はこの世に生み出されなかったかもしれない。継母との不仲、子どもの世話、学校にいけない状況で、作家は空想に逃げることで自分を守り、満たされなさを補おうとしていたようである。夢に描いていた父との生活が実現したものの、失意の日々となる無念さはどんなに寂しいものだったのだろうか。しかしながらまさにその体験こそが、アン・シャーリーの誕生に繋がったのだろう。

マリラ、マッシュウ像は、祖父母に重なるところが大きいだろう。特にマリラ像には、長老派教会の信者として、虚栄を恐れ、物語を読むことも書くことも不道德である、とする一面があった。文才があり、物書きになりたかったモンゴメリにとって、そんな祖母による厳しい躰は息苦しかっただろう。しかし、父宅に引き取られた後、そこでの生活に失望して初めて自分の居場所がキャベンディッシュの祖母宅にあること、そしてどれだけ祖父母に愛されていたかに気付くきっかけとなったのではないだろうか。モンゴメリが父宅より家に戻り、また、祖父の死後、祖母を生涯守り抜いた姿勢には、祖父への深い愛情や感謝を感じざるを得ない。作家自身が、赤毛のアンは「愛の物語である」と自叙伝で述べている。

(3) マッシュウと父親像

「赤毛のアン」は単なる少女の成長物語ではなく、アンによって、周囲の環境や大人たちの心の変化を扱った作品でもある。

愛情あふれるマッシュウとマリラ像、特にマッシュウの人物像には、モンゴメリが実の父親に抱いていた理想のイメージが重ねられていたに違いない。自叙伝に、父親が、モンゴメリの書いた詩が初めて「パトリオット」紙という新聞に載っていたのを見て、持ち帰ってくれたという喜びに満ちた逸話がある。別家庭を持つってしまったとはいえ、モンゴメリにとっては、死別するまで父親は自分の大切な理解者であったのだろう。

マッシュウは出会いから死別の時まで終始アンの味方であり、アンの状態を全受容し、人との繋がりで生じた傷つきを癒してくれる存在であった。また、新たな世界の広がりへのきっかけを作ってくれたのもマッシュウだった。

マッシュウは、母子の二者関係に入り込み、子をより広い世界へと誘う父親の役割を担っていたと考えられる。またマッシュウにとっても、彼の世界を広げ、彼のこれまでの行動パターンを変化させたのはアンの存在であった。

(4) アンとマリラの統合

アンは自分に様々なコンプレックスを持ち、空想の自分を理想としてきた。物語の展開とともに、アンの精神的な成長は、現実での活動を通して自信をつけたアンが少しずつ本当の自分を直視し、それをよしとしていくプロセスとして描かれている。アンのおしゃべりは、後半激減し、心情の表現が増加している。思いついたことを全て言葉に出してしまうのは「外言」という幼い心性の表れであり、そこから心情の語りとしての「内言」への変化は、アンの精神的な成長と心の安定を表している。

一方でマリラもまた変化している。愛情を外に表現しない抑制的な状態から、徐々に発話が増えている。

作家がこれを意図せずに無意識に展開していたとすると、作家と祖母の間にも同じような「統合」があったのかもしれない。

(5) 若草物語との対比より

作中に、オルcottの「若草物語」のエピソードが引用されるところがある。「赤毛のアン」よりも早い時代に書かれた物語だが、道徳的なメッセージが込められ、モンゴメリはそれを良く思っていなかったようである。髪を切るエピソードを取り上げると、「若草物語」の次女ジョーが、戦地で病に倒れた父親の看病に行く旅費のために髪を切る一方で、アンは緑に染まった髪を自分の為に切り落としている。

モンゴメリは、「誰かのため」ではなく、自分の為に行動し、生きることをこの物語の中で訴えているとのでは、と菱田(2014)は考えている。そのように生きたくても生きづらかった時代、モンゴメリは、作品の中では、そのように生きる自由を主張できたのだろう。

(6) 女性としての生き方

男性にしか相続が許されておらず、職業選択も限られていた時代に、女性が自分一人の力だけで自立して生きることは大変困難であった。そういう状況下で、モンゴメリの目指した女性としての生き方、つまり、女性にとって本当に大切なものは何かを、作家は作品の中で浮かび上がらせている。大切なものに囲まれて、自分の人生を切り開いていく道をアンに選ばせている。それはまさしく作家が歩んだ人生そのものであった。それはまた、家を重んじる文化を持つ日本でも本作品が受け入れられやすかった要因のひとつではないかと考える。

(7) 役割逆転・本当の家族に

物語の中で、アンとマリラは役割を逆転させていく。マリラはマッシュウの死によって、課せられていた役割から解き放たれ、本来の自分の姿を取りもどす。一方でアンは、マッシュウの死を通じて、いかなる空想によっても逃れられない現実の自分をよしとし、受け入れていくプロセスを進んでいく。

物語の終りでは、「家」を失いかけていたマリラに、アンが家長(働き手)になることで、マリラを家なしの「孤児」にせず、「家」を与える存在になる。

この結末に、フェミニズムの立場からの批判があったとされる（菱田、2014）が、家を守ることは女性の生きる権利を守るための、困難で価値ある目標であり、モンゴメリにとって実際にはなし得なかった栄誉だったのである。

（8）「孤児」であることによる傷つきからの回復過程という視点から

アンのように、親と何らかの事情で暮らすことができない子どもたちが過ごす児童養護施設で、筆者は子どもたちの心理ケアを実施してきた。特に集団を対象としたグループセラピーでは、表現する自由（ある程度の条件の元ではあるが）とその受容をベースに、枠組み（集団や社会のルール）の再編、傷つき体験の語りの受容、未来志向性、をテーマに、子どもたちと共に考える時間を持っている。初めは自分の気持ち等、自由に語れなかった子どもたちであっても、セラピーを通じて、自分の言葉で気持ちを表現してよいのだ、という体験をすると、未来の自分像を描きはじめる。

アンは精神的成長や傷つきからの回復過程は、まさにこのセラピーのプロセスをみるようでもある。里親家庭にしながら、自分が里子であることを認識し、しかもその養育環境は何度も変更されている。そのような背景にあって、自分の存在について、自分はこの世にいてもよいのだろうか、という疑問を持たない子どもはいないだろう。しかしながら、アンは自分の特性を前向きに生かしながら、自らの力で受容的な環境を作り出し、徐々に周囲の信頼を勝ち得ていく。当時の文化背景による厳しい社会のルールがあったのにも関わらず、その枠組みでさえ、ついには自分のものとし、最後には大切な人、大切な場所を守る力を身に付けている。

アンが体験してきた成長のプロセスは、社会的養護の対象となる児童の心理的支援において目指すものでもある。アンは人物像には、モンゴメリ自身の自己像の投影を見ることができ、アンは精神的成長や傷つきからの回復は、要保護児童を抱えていく環境に必要な要因を示

唆するものでもありと考える。それは、さびしい幼少期に作家が求め、心の支えとなったものだったのである。

文献

Erikson.E.H. (1950,1977) *Childhood and Society*, Norton & Company, Inc (仁科弥生 (訳) 幼児期と社会) みすず書房

藤森旭人 (2016) 児童・青年期のこころの理解 ミネルヴァ書房

Kohut.H.(1977) *The Restoration of the Self*, International Universities Press. (本条秀次・笠原嘉 (監訳) (1995) 自己の修復 みすず書房)

松瀬喜治・松瀬留美子 (2013) 絵本に学ぶ臨床心理学序説 ナカニシヤ出版

茂木健一郎 (2013) 「赤毛のアン」が教えてくれた大切なこと PHP 研究所

Montgomery,L.M.,(1908)*Anne of Green Gables* (村岡花子 (訳) (2014) 赤毛のアン 講談社)

Montgomery,L.M.,(1917)*The Alpine Path* (山口昌子 (訳) (1979) 険しい道 モンゴメリ自叙伝 篠崎書林)

Montgomery,L.M., (1923) *Emily on New Moon* (神鳥統夫 (訳) (2002) エミリー (上) (下) 偕成社)

菱田信彦 (2014) 快読『赤毛のアン』 彩流社

澤田優子 (編) 赤毛のアンの世界へ 学研 University of Guelph(1985) *The Selected Journal of L.M.Montgomery Volume I 1889-1910* Tronto Oxford University Press(桂宥子 (訳) (1989) L.M.モンゴメリの日記 I (1889-1910) 篠崎書林)

Winnicott.,D.W. (1971) *Playing and Reality* (橋本雅雄 (監訳) (1979) 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)

山岸明子 (2015) 心理学で文学を読む 困難を乗り越える力を育む 新曜社